
他人の匂い

齊藤狐兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

他人の匂い

【Nコード】

N7010M

【作者名】

齊藤狐兎

【あらすじ】

強い妄想癖のある中学二年生新井健二は、立て続けに隣のじいさんと級友の死に直面した。健二は二人の死にある共通点を見出す。

二人が死の前日に発していた強烈な体臭。

周囲はそのことに気づいていない。

コンプレックスにまみれていた健二は有頂天になる。

自分は特別な人間だ。

誤った認識のもと、健二は暴走する。

好々爺の悪臭

通路路を進む足は異様に重かった。足枷をはめられて歩いているような感じ。

行きたくない行きたくない。帰りたい早退したい。まだ学校に着いてもいないのに。

「健二君おはよう」

声のした方に目をやると、隣の家に住む山田のおじいさんが健二に向かって会釈していた。両手にゴミ袋を持っている。

「おはようございます。お久しぶりですね」

「そうだねえ。健二君がアフリカ旅行に行って以来だから、二週間振りくらいかな。おみやげにもらったマサイ族の木彫り人形、健二君が選んでくれたんだって。あれ、いいよねえ。あの憎らしい表情。ケースに入れて居間に飾ってるんだ。本当にありがとう」

「喜んでもらえてよかったです」

「アフリカはどうだった」

「すごかったですよ。象とかライオンとか、なんかもう世界が違すぎて、日本で悩んでいたのが馬鹿みたいに思えました」

「そうかそうか、それはよかった」

山田のおじいさんが言った。笑顔が大便を拭いたあとのティッシュみたいにくしゃくしゃだ。

好々爺。そんな言葉がぴったりくる。なんだか元気が出てきた。今日はこのまま突っ走るぞ。

「それじゃあ、行ってきます」

頭を下げておじいさんの横を通り過ぎようとしたその時、とてつもない悪臭が健二の鼻腔を襲った。

「うわぁー」

強烈な臭いに二メートル弱飛び退く。

「大丈夫かい、健二君」

「なんか、とんでもない臭いがして……」

「とんでもない臭い。ひよっとしてこれかなあ」

おじいさんは手に持ったゴミ袋を持ち上げて、犬のようにクンクン嗅いだ。

「そんなに臭わないけどなあ」

首をかしげるおじいさん。その間も強烈な臭気は健二の鼻腔を犯し続けていた。

「失礼します」と頭を下げ、万引きしたスーパーの出口で声を掛けられた少年のように、走ってその場から立ち去った。

おじいさんが見えなくなる距離になってから立ち止まり、一息ついた。

一体あの強烈な臭いはなんだったんだ。意識を刈り取られるような臭いだった。おじいさんの言う通り、あのゴミ袋が臭いの源だとしたら、あの中には一体なにが入っているんだろう。

昨日の二時間ドラマみたいにバラバラにされた死体だったりして。想像して寒気がした。

袋の大きさからして子供だろうか。そこらへんを歩いていた小学生を無理矢理家に連れこんで……。いや、待てよ。もし死体を切断したのだとしたら別に一回で捨てなくてもいいのだ。おじいさんは一体だれを殺したのだろう。奥さんかなあ。娘さんかなあ。無差別殺人って可能性もある。そうになったらもう推理しようがない。

ピッピッピッピッ。腕時計が鳴った。八時半を知らせるアラームだ。アラームは耳障りな電子音と共に健二に客観性をもたらしただ。危ない危ない。いつもの妄想癖が出てしまった。

あんなやさしいおじいさんが人を殺したりするわけじゃないじゃないか。魚や食肉が腐ったってあんな臭いくらいするだろう。でもあんな殺人級の臭いになるのか……。

駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ。こんなことばかり考えてるからいいじめられるんだ。

健二は頭のモヤを振り払うように全力疾走で学校に向かった。

からすの鳴き声が響く夕焼け空。健二は半開きの口で地面を見つめていた。蟻の生態観察をしていたわけではない。本人は家に向かっているつもりなのだが、足がまったく動いていないのだ。

「どうしたんだい。浮かない顔して」

顔を上げると、山田のおじいさんが慈悲深い眼差しで健二を見ていた。

「別になんでもないです」

目を逸らして答えた。

本当は急行電車に飛び込みたいような心境だったが、赤の他人のおじいさんに言うようなことではない。

「そうかい……。こんなおいぼれでも相談に乗るくらいは出来るから、なんかあったらいつでも言ってきなさい。健二君は長男の孫によく似ていてねえ。他人とは思えないんだよ」

その言葉が健二を繋ぎ止めていた理性の糸を叩き切った。涙がとめどなく溢れる。

「僕は、なにも間違っていないんです。ただ僕は正しいことをしただけなんだ」

「そうかそうか。健二君は悪くない。一体なにがあっただんだい」

山田のおじいさんが幼子をあやすように言った。

「帰りの、会で、なにか、伝える、ことがありませんかって、日直が、言うから、掃除が、行き届いて、ないって、言っただんです。うっ。だって、廊下も、教室も、ほこりだらけで、ひどかったから」

「そしたら、クラスの友達にいじめられたんだね。そうかそうか。」

よしよし、健二君はなにも悪くない。なにも心配することはないよ。山田のおじいさんが健二の肩を抱いた。

「おじいさん、僕、僕……」

健二はおじいさんの一見薄い骨太な胸に飛び込んだ。そして次の瞬間おじいさんを思い切り突き飛ばした。

憐れなおじいさんは尻から転倒し、後転が途中で失敗した結果、肛

門を宙に晒しているような格好になった。

「くせええええええええ」

思わず口に出していた。突き飛ばしたのも本能による反射的なものだった。

なにが起こったのか理解できず呆然とするおじいさん。突き飛ばした健二も自分のやったことが信じられなかった。

「す、すいません。あまりにもく……」

その先が言えない。臭いと言われていい気がする人間などいない。「すいません。失礼します」

どうしようもなくなつて、その場から逃げ出した。おじいさんは呆けたような表情でその後姿を見つめていた。

なんであんなことしたんだ。人に暴力を振るうなんて最悪だ。分からない。分からない。

家に帰ってきてからずっとこんな調子だった。頭が混乱してスクラブル交差点みたいになっている。

あの臭いのせいだ。あれはゴミの臭いなんかじゃない。山田のおじいさんの体臭だ。一体いつからあんな体臭を発するようになったのか。アフリカ旅行に行く前はなんの臭いもしなかったわけだから、ここ二週間の話だろう。

肝臓の調子で体臭が変化すると、NFKのためして頂戴でやっていた。ひよつとしたら山田のおじいさんもどこかが猛烈に悪いのかもしれない。もし病気だったら早く治療しなければいけない。でもどうやって訊けばいいんだ。

「おじいさん、体臭やばいから、病院に行ってきたほうがいいと思いますよ」って訊くのか。それともさりげなく「最近の人間ドッグってすごいらしいですよ」なんて言つて検査を勧めるか。

どっちにしても自分には無理だ。そんなコミュニケーション能力はない。

健二は頭をかきむしつてベッドに倒れこみ、そのまま眠りの世界に

引きずりこまれていった。

パチッと目が覚めた。部屋の中は真っ暗。照明のひもを引っ張り電気をつける。時計を見たら三時十五分。

熟睡感はあるのにほとんど寝ていなかったのか、と一瞬思ったが、すぐにそれが大いなる勘違いだと気がついた。外を見れば一目瞭然。街灯だけが気を吐く真っ暗闇の世界だ。十二時間近く寝ていたらしい。

ベッドの上で体を伸ばした。キュルキュルと胃袋が泣いている。なにか食べなくては。

階段を下りて居間に行くと、食卓にラップが掛かったカレーライスが置いてあった。普段疎ましいだけの母親もこういう時には感謝せざるをえない。

レンジでチンして、あまり大きな音を立てないようにするようにカレーライスを食べる。するとどこからか救急車のサイレンが聞こえてきた。

こういった第三者の緊急時に健二の胸は躍った。怪我なのか病気なのか。命に別状はあるのかないのか。救急隊員になった自分を妄想するのだ。

サイレンの音が近づいてくる。この町内だろうか。さらにサイレンが近づく。

救急車が壁一枚隔てて、健二がカレーライスを食べているその真ん前に止まった。

嫌な想像が頭をよぎる。

ひょっとして、自分が死んだのではないか。

死んだ死んだ死んだ死んだ。まだ十四歳なのに。まだキスもしたことないのに。キスだけじゃなくてその先だっていっぱいしたかったのに。秋葉原だってまだまだ行きたいし、サンリオピューロランドだってまだ行つてない。まだまだまだやりたいことがたくさんあるのになんで死ななきゃいけないんだ。

理不尽な死に対する怒りと恐怖で発狂する寸前、隣のアパートからの救急隊員の声で我に帰った。

救急車を呼んだのは隣のアパートの誰かだ。そりゃそうだ。ピチピチの14歳が死ぬわけない。死ぬ理由がなにもないんだ。安堵して健二は外へ出た。

闇の支配に抵抗するように、救急車の点滅灯が光を放っている。

隣のアパートから山田のおじいさんが担架に乗せられて出てきた。

あんなに元気だった山田のおじいさんがどうして。昨日のおじいさんとの一幕がフラッシュバックした。

ひよっとして、自分が突き飛ばした拍子に……。

心臓のBPMがハードコアのビートを刻みはじめた。

まさかあれくらいで人間が死ぬわけない。でも相手は七十を過ぎた老人だ。司法解剖されたらどうしよう。

おじいさんは救急車に乗せられ、耳をつんざくサイレンと共に去っていった。

胸の前で合掌しながらおじいさんの無事を祈った。助かれ助かれ助かれ助かれ。

強く押し合っている両手に額から大量の冷汗が滴り落ちた

デブで首がない田所とチビでモミアゲ部分が黒く変色している木村

数日後、山田のおじいさんは死んだ。健二はそのことを母親から朝食時に聞いた。シヨックで口に入れようとしていたハムエッグを味噌汁の中に落とした。

「なんでおじいさんは死んだの」

出来るだけ平静を装い、漬物を頼張りながら訊いた。

「急性心不全みたいだよ。年も年だからしょうがないよね」

急性心不全！自分が突き飛ばしたことは関係ないんだ。

安堵のため息がもれ、拍子に口の中に入っていた漬物がみそ汁の中に落下した。

「もう、さつきからなにやってるのよ」

母親がフキンでこぼれたみそ汁を拭く。健二は喜びのあまり皺が目立ってきたその額にキスしようと思ったが、やっぱり気持ち悪くなつて止めた。

数日間の陰鬱な気分ともこれでお別れ。悩みから開放された反動でテンションがマックスまで上がった。白米みそ汁をかつこみ鞆をつかんで外へ飛び出す。

道をすれ違う人々にハグして回りたい気分。スキップしながら、時折、ケンケンパを交えて進む。早起き老人やコンビニ店員の冷たい視線など、ハイな健二の前には無力である。

気付けば学校に着いていた。テンションは家を出た時より更に上がっている。

興奮の渦に巻かれた健二は、教室に入るやいなや

「おはヨーグルト！」と大声で言い放った。

シーーーーーーン。笑い声が飛び交う教室が一瞬で静まり返った。

「えっと、おは洋梨、みなさん。えっ、僕が用無しだって」

シーーーーーー

ーーン。

さすがの健二も自分の過ちに気がつかずにはいられない。とんでもないミスを犯してしまった。自分がクラスメートに迫害されていることをすっかり忘れていた。

ここでお調子者がいれば、うわーでたー、なんて言っただけで済ませるものだが、まだ時間が早かったため、教室には真面目な男子と一言も話したことがない女子しかいなかった。

クラスメートの白い目線が健二を突き刺す。ズブズブズブズブ。うわああああああああ。

健二は教室を飛び出し、トイレへ大急ぎで閉じこもった。

やってしまった。やってしまった。今まで自分はただの真面目なつまらない奴だったけど、これで頭のおかしいつまらない奴に格下げされてしまった。

はああああ。健二が苦悩の叫びを上げる中、トイレに誰かが入ってきた。健二は両手で口を塞ぎ声を抑える。

「あいつまじなんなんだろ。頭おかしいのかな」

「うん。おかしいんだろ。ひよつとしたらアフリカ旅行じゃなくて、病院に入院してたんじゃないの」

「ああ、ありうる。ぶひー」

「間違いないっしょ。うひよひよひよひよ」

デブで首がない田所と、チビでモミアゲ部分が黒く変色している木村の声だ。せめて二年の番長である小熊や野球部エースでイケメンの秋本、女子に一番人気の門馬とかに言われるならまだしも、自分と大して変わらない身分のこいつらに馬鹿にされるなんて。

屈辱で身体が震えた。

「あいつどこいったんだろ」

「家に帰ったんじゃないの」

「ひよつとしてこのトイレにいたりして。ぶひひひひ」

「ありうるな。うつひようつひようつひよ」

屈辱が怒りに、怒りが恐怖に変わった。

あいつらが自分に気づいたらどうなるんだろうか。すぐさまクラス中に知れ渡るのは間違いない。便所に隠れていた新井。新井だけにお手洗いが好きなんだと馬鹿にされるのだ。クソくそ糞。

ひよひよっひよっひよ、ぶひっひっひ。二人がトイレから出て行った。一呼吸おいてトイレへ大々から出る。二人が戻ってくる気配はない。

助かったあ。緊張が一気にほどける。背筋を伸ばして思い切り深呼吸……、

くせえええええええええ。

それは糞尿の臭いなどではなく、山田のおじいさんから嗅いだ腐敗臭だった。しかも、山田のおじいさんのときよりずっと臭い。

耐え切れずにトイレから飛びだして、思い切り息を吸った。いつもの雑多な学校の匂いが心地好い。

一体いまのはなんだったんだ。自分の鼻がおかしくなったのか。

激しい頭痛がした。もう今日は帰ろう。

健二はよろよと教室へ戻り、鞆を持ってへなへなと家路についた。

健二の勘違い（前書き）

健二の勘違い

翌日、田所と木村のチビデブコンビが死んだ。学校からの帰り道、自転車に二人乗りしていたところを居眠り運転の四トントラックにはねられたのだ。

田所と木村の机には花が飾られ、全校朝会で黙祷が捧げられた。それなりに悲しい雰囲気には包まれたが、涙を流す者は誰一人としていなかった。もちろん健二も泣いてなどいない。むしろ喜んでいた。

自分を馬鹿にした天罰だ。

だが感謝してもいた。あの二人のおかげで健二は自分が会得した超能力に気がついたのだ。

山田のおじいさんの死と田所・木村の死には共通項が一つあった。例の悪臭である。あの臭いがしてまもなく三人とも死亡した。まだはっきりとは言えないが、あの臭いが三人の死と関連している可能性は高い。そしてあの臭いは、他の人間には感知できない。出来たら同じ教室で机を並べるなんて不可能だろう。つまり自分だけに備わった超能力。素晴らしい。

しかし、なぜそんな能力が自分に備わったのだろうかと考えた末に、一つの出来事が思い当たった。

アフリカで罹った原因不明の熱病だ。能力開発の契機となったのは熱病そのものではなく、サバンナの真ん中で息も絶え絶えになった健二になんとか族のなんとかという医者に該当する職業の人間が飲ませてくれたなんとかという植物をすり潰して液状にしたものではないかと推測した。それを飲んだ翌日に健二は嘘のように全快したのだ。

まあ、あくまでも現段階での推定でしかないし、別にきつかけなくてもいいことだ。大事なのは、素晴らしい能力が自分に備わったという事実だ。

ひゃっほーい。健二は自分の能力に舞い上がった。もう今までの真面目しか取り柄がない陰の存在ではないのだ。妄想はオペラ歌手が膨らました風船のようにあつという間に膨らんだ。

超能力者としてマスコミに取り上げられ、テレビに出演し、本を出版。家でちやほや。学校でもちやほや。どこに行ってもVIPとして扱われ、女の子だって選り取り見取りの取り放題。

自尊心も妄想同様あつという間に膨らんでいった。

他の奴等とは次元が違う。他の奴等とは生物としてのスキルが違う。他の奴等が何人束になったって自分の方がずっと価値がある。溢れ出した自尊心は横柄な態度になって表れた。胸は常に前へ張り出し、歩幅は1.5倍に。「股も自然と開き、座った時には必ず脚を組むようになった。」

「あいつ最近おかしくない？」

「うん。キモいくせに調子乗ってるよな」

そんな陰口は健二にとって雑音でしかない。工事現場で電動ドリルが発する騒音みたいなもので、心地よいものではないが気にするほどではないのだ。

スペシャルな人間を他人が妬むのは当たり前のこと。

もともと持っていた独り善がりな気質も手伝い、健二の意識は完全に別の階層へ飛んでいた。

回りのクラスメートがなんの能力もなくそ餓鬼に見えた。

受験勉強に精を出すなんてアホくさい。凡人のやることだ。喧嘩に明け暮れるなんて愚の骨頂。健二はひたすら妄想の世界で時を過ごした。

リムジンに白髪の執事。小柄だけと出るところはしっかりと出ているかわいらしいメイド。ジャグジー付きの風呂に特大ウォーターベッド。そこでかわいいメイドにあんなことやこんなことをするんだ。ぺちよぐりぺちよぐり。ひっひっひっひっひ。

「新井、なにを笑ってるんだ。授業中だぞ」

教師に怒られ、健二は正気の世界に戻った。

「ああ、すいません」

反射的に謝ってしまった。でもちよつと待てよ。こいつはたかが中学校の一教師。本当に謝る必要があったのか。そもそもこいつにそんな権限があるのか。

「なぜ笑ってはいけないのですか？」

健二は毅然と問いただした。

「はっ。おまえはなにを言っているんだ」

「なんの権限があつて、おまえは僕の笑いを禁じるのかと訊いてるんだ」

「なんの権限で。おまえそりゃ、教師の権限に決まってるだろうが」
「中学校の教師に僕の表現を一方的に禁じる権限があるんですねえ。へ、すごいなあ。それはもちろん六法全書に記載されているんですよねえ。何条ですか。帰って調べるので教えてください」

「へ、屁理屈を言うな。授業中に笑っていいわけないだろう」

「だ、か、ら。僕の笑いがもし授業の妨げになるのであれば、注意されても仕方ないですよ。でも、僕の笑い声は授業を中断させるほど大きなものだったでしょうか」

「いい加減にしろ。勉強する気がないなら出て行け」

「いいえ。出て行きません。なぜなら僕は授業を受ける権利があるからです」

「なっ！？もう、勝手にしろ」

教師は怒りで顔を赤らめ、健二をいないものとして授業を進めた。勝った。まあ、当たり前の結果だけどそれなりにうれしい。

ハッハッハ。思わず声に出して笑ってしまう。しかし、教師は何も言っていない。健二は更に大きな声で笑った。

ハッハッハ。ハッハッハ。アハアハアハアハアハアハアハ。ヒヤッヒヤヒヤヒヤヒヤ。

これが選ばれし者の特権か。健二は変声期が終わったばかりの不安定な声で笑い続けた。

変人、狂人、変態、基地外。さまざまな侮蔑のレッテルが健二に貼られた。学校内で健二に話しかける人間はいない。授業中、休み時間、給食時、登下校、健二はいないものとして扱われている。不良グループも健二には一切からんでこなかった。本当にやばい奴だと思われているんだろう。

こんな状況にさすがの健二も嫌気が差してきた。

おかしい。こんなはずじゃない。

健二の構想、というか妄想では、とつくのとうに死の予言を的中させて学校中の人気者になっているはずなのだ。それなのに、くそう。なぜあの臭いが一切しないんだ。

苛立ち極まって、拳で廊下の壁を思い切り叩いた。周囲にいた生徒が驚いて健二を見たが、すぐになにごとくも無かったかのように歩き始めた。

裏で自分を黙殺する取り決めでもしてるんじゃないか。そう勘ぐらずにはいられないほどに足並みが揃っていた。

実際のところ、健二を黙殺すべしという取り決めは存在した。

「健二君は調子が悪いのでそつとしておいてあげましょう」という建前の上だったが、実際に健二は孤独に苛なまれていた。

どうにかしなくては。健二は焦った。このままではただの嫌われ者、変人として中学生生活を終えてしまう。それは困る。将来ビツクになったとき、「中学時代は手のつけられない変人で、恋人はもちろん、友人一人すらいない、教師すら関わりあいになるのを避けるような正真正銘の爪弾き者でした」なんて暴露されたら最悪だ。

悶々とした日々を送る健二だったが、ある日眠りにつこうと入ったベッドの中で決心した。

このままではおかしくなってしまう。なんとかしなくてはいけない。待っているだけでは駄目だ。

ベッドから跳ね上がり、よそ行きの服に着替えると外に飛び出した。

焦燥に背中を押されて向かった先は繁華街、秋葉原だ。

これだけの人間がいれば一人ぐらいは臭うはずだと、健二は当てもなく秋葉原をさまよった。しかし、そうそう死ぬ直前の人間には出くわさない。

うーくそう。うーくそう。

目を血走らせ獣のようにうなる健二に、泥酔したサラリーマンでさえも道を譲った。それほどに危ないオーラを全身から発していたのだ。

誰か死ぬやつはいねーか。誰か死にたい奴はいねえのか。

なまはげのように徘徊する健二の暗い目線の中に、一人の女とそれを写すテレビカメラが入った。タスキを肩にかけ、豊かな髪の毛を後ろにひつつめた堅そうな女。タスキには 女性にもっと力を

豊田幸子 と書かれている。

「女性の仕事や権利を守り、子育て環境の更なる向上を目指します。豊田、豊田幸子をよろしくお願いします」

政治家か。テレビで参院選がどうたらと言っていたことを思い出した。こいつが死ぬばいいんだ。自分で予言して自分で殺せばいいんだ。なんでこんな簡単なことに気付かなかったんだらう。

健二はよろよると豊田に近づいた。揃いの白ジャンパーを着た豊田の選挙スタッフが健二に気づき、でかい尻を振るわせて慌てて近づいてきた。

「豊田幸子をよろしくお願いします」

そう言つて、選挙公約と胡散臭い豊田の笑顔が貼りついたチラシを渡してきたが、その顔には不審者に対する警戒が滲み出ている。カメラも反応して健二を撮っている。

今がチャンスだ。腹の底から声を張り上げた。

「この女、豊田幸子は死ぬぞ。近い将来に必ず死ぬ。100%死ぬ

ぞ」

周囲の聴衆がざわめいた。駅に向かう人の流れが一瞬止まる。

「なにを馬鹿なことを。そんなことなんであんたに分かるのよ」

デカケツ選挙スタッフババアが目をひん剥いて言った。

「僕には分かるんだ。僕は超能力者なんだ」

「ふざけんじやないわよ。なにが超能力者よ。ちゃんちゃらおかしい。ただのいたずらじゃ済まないわよ。これから日本を担っていく幸子さんが、死ぬるわけないじゃない」

垂れ尻肉選挙スタッフババアがそう言うなり健二につかみかかってきた。他のスタッフがババアの暴走を止めに入る。

羽交い絞めにされてもなお、ババアは喚き散らした。

「なんで幸子さんが死ぬのよ。あんたが代わりに死ねばいいんだ。私が殺してやる。邪魔する奴はみんな殺してやる」

ババアに注目が集まっているすきに健二は逃げ出した。すでに力メラには十分映ったので、ここに長居する理由はない。駆け足で現場を離れた。

ざまあみやがれ。これで俺も有名人だ。ビッグだ。著名人だ。はっはっは、と笑いながら重大な欠陥に気がついた。

豊田幸子は放っておいても死なない……。自分が殺さなくてはいけないのだ。今から殺しに行くか。そんなの無理だ。もし、豊田幸子が死んだ場合、自分は間違いなく第一容疑者じゃないか。

アー、なんて馬鹿な真似をしてしまったんだ。正気じゃない。病気だ。

学校の連中が頭に浮かんだ。

「ついにやらかしたか」これでご自分あいつの面みないですむわ。チョーうれしいんだけど「ちゃんとした施設に入れなくちゃだめだ」あいつがいなくなったら繰上げで学校一の嫌われ者になっちゃうよ。うわーん」

両親の悲しむ顔も浮かんできた。

「なぜあんなことをしたのかまったく分かりません。昔は良い子だ

ったんです。成績も良くて、みんなの人気者で、学級委員だつてやっていたんですよ。へ恥ずかしい限りです。これからしっかりと教育して、もう二度とこんなことがないように、精一杯がんばっていききたいと思います」

家庭が崩壊する。お父さんはお母さんを殴り、お母さんはパチンコで現実逃避するんだ。そして原因となった僕は精神病院に強制収容。最悪だ。

大粒の涙が健二の頬をつたった。

う、うわあああああん。うわあああああん。
すれ違う人が振り向くほどに健二は号泣した。
人生おわた。人生おわた。うわあああああん。

その時、遠くから軽快な音楽が聞こえてきた。目をこらして見てみると、通りに特設されたステージで女の子三人が歌っており、それを取り囲むようにかなりの人だかりが出来ている。健二は吸い寄せられるように近づいていった。なにやら聞いたことのあるメロディ。こ、これは、

シャンプー ラバーズの「シャンプーハットはもう卒業」じゃないか。

健二はステージに向かって全力で走った。人にぶつかろうと、罵声を浴びせられようと一切気にしない。生でシャンプー ラバーズが見られるなら、マザーテレサに嫌われた方がいい。

人ごみを押しのけかきわけ、なんとかステージの前までやってきた。

目の前で夢にまで見たシャンプー ラバーズの三人が歌っている。百八十近い長身が魅力のウーちゃん。日本人形を想わせるカリタカ。ひどい斜視がチャームポイントのドッチ。ひiiiiiiiiiiiiiii。たまんねえええええ。

曲が終わり三人が水分を補給している。あのペットボトルがうら

やましい。あのペットボトルになりた〜い。

「それでは最後の曲になりました」

ウーちゃんが額に汗を滲ませながら言った。

えええええええ。図太い悲しみの声が聞こえた。健二も一緒になつて叫ぶ。自分が一番言う権利があるはずだ。まだ一曲もまともに聴いてないんだから。

「みなさん聞いてください」

三人が、せーのと呼吸を合わせる。

「コスメティックリサイクル 界面活性剤はノンノー」

うおおおおおお。地面を揺らすほどの歓声。健二の声もその中に混じっている。

シャンプリーサイクルは健二が初めて買ったCDであり、シャンプー ラバーズの曲で一番愛聴している曲だった。

これが最後の曲だとかはもうどうでもいい。この曲を生で聴けたら死んでもいい。

嫌なことがあつたら同じだけいいことがある。相田みつお、ありがとう。

豊田幸子のことなど、健二の頭の中に微塵も残っていなかった。イントロのシンセサイザーが鳴り響き、エフェクトの効いたボーカーが始まる。

かりたか、かりたかあああ！！健二は我を忘れて叫んだ。

お酢をリンスにお酢をリンスにお酢をリンスにして洗う

お酢をリンスにお酢をリンスにお酢をリンスにして洗う

粉チーズで♡ファンデーション♡

イカ墨で ♪白髪染め♡

きゅうり白菜♡顔面パック♡

お塩で体を♡洗います♡

お酢をリンスにお酢をリンスにお酢をリンスにして洗う

お酢をリンスにお酢をリンスにお酢をリンスにして洗う

間奏が入り、メンバーがステージぎりぎりまでやってきた。

やばい。手を思い切り伸ばせば届きそうだ。そんなことを考えていたら、ドッチが踊りながら腕を伸ばして観客と握手しだした。

ドッチが近づいてくる。チャンスだ。健二は思い切り腕を伸ばした。ドッチが健二の手に気付いて握ろうとする。ドッチの笑顔が目の前に。何度も妄想したドッチの生肌に触れられる。緊張で心臓が少しせり上がった。

ドッチの手が近づく。あと三十センチ、十センチ、五センチ。きたあああああ。

健二はドッチの手を握り締めた。あたたかい。でもなんか妙な感触、ってうわあああ。

握手した手を見て仰け反った。

ドッチと健二の手は結ばれていた。ただその上から得体の知れない毛むくじやらの手が二人の手を包み込んでいたのだ。

ジメつとした感触に吐き気を催す。ドッチも同じように感じたらしく、すぐに手を引っ込めてしまった。その瞬間、

くせえええええええ。

例の刺激臭が健二を襲った。犯人はおそらくこいつしかいない。毛むくじやらの手をたどっていくと、黄色いバンダナをした、いかにもなピザオタク口を半開きにして立っていた。

間違いない。こいつが臭いの源だ。髪の毛がぼさぼさで顔がよく見えないが、おそらく二十代だろう。自分の能力に気付いてから初めての臭い。どうしよう。彼を使って有名になるのは無理だけど、知らない顔をして通り過ぎていいものなのか。

ピザオタクが健二の視線に気付いて振り向いた。ねずみのような目に警戒心をたたえて健二を見やる。

「あ、あの、なんというか。その、なんかやりたい事とがありますか？もしあるんだったら、すぐにやった方がいいです。本当に」
ピザオタクの目が一層鋭くなった。

「あやしい者じゃないんです。ただ、その、人生っていつなにが起るか分からないじゃないですか。だからやっぱり、やり切るとい
うか、毎日を必死で生きることが僕は大事だと思っんですよね」

これではまるで新興宗教の勧誘者のようだ。自分だったらこんな奴の言うことは絶対に信じない。

ピザオタクは健二をにらみつけながら後退した。そのとき健二の横で大きな歓声が起こった。なんと、今度はウーちゃんが手を伸ばして客と握手しているのだ。

うおおおお。健二はさっきよりも激しい雄叫びをあげた。ピザオタクの寿命などどうでもいい。健二はシャンプー ラバーズの中でウーちゃんが断トツで好きだった。恋していると言っても過言ではない。

ウーちゃんウーちゃんウーちゃんウーちゃん。

母親を見失った幼児のように健二はわめいた。ウーちゃんが健二に気付く。健二は更に大声を出し、全身全霊でウーちゃんにアピッた。ウーちゃんが健二の方に手を伸ばす。

やばい。まじでやばい。ウーちゃんと触れ合える。

手と手が触れ合おうとしたそのとき、ねこじらしを当てたようなこそばゆい感触が手のひらに走った。

ひゃああ。思わず手を引っ込める。手に触れたものはねこじらしなどではなく、手の甲から毛ほうきのように生えたバンダナピザオタクの体毛だった。

ひゃあああ。気持ちわるい。

その気持ち悪い手が、半ば無理矢理にウーちゃんの手を握っている。

ふざけやがって。健二は息を止めバンダナピザオタクの前腕に向かって思い切り肘を落とした。

「うつつ」

バンダナピザオタクの手がウーちゃんから離れた。健二はその隙にウーちゃんの手を両手で握り締める。

驚いた様子のウーちゃんだったが、すぐに笑顔に戻り、長身を屈めて健二にささやいた。

「ありがとね」

はああああ。ウーちゃんの吐息が耳元に……。なんて幸せなんだ。もう死んでもいい。

ウーちゃんの香りを少しでも感じたいと深呼吸した刹那、

くくく、くせええええ！！

まさか、信じられない。信じたくない。しかしその悪臭は間違はなくウーちゃんから出ていた。

ウーちゃんがなぜ！？まさか、ピザオタクに手を握られたことを苦に自殺とか。いや、ピザオタクがウーちゃんを殺すのかもしれない。

ちょっと待てよ。ウーちゃんの臭いとは微妙に違う悪臭が遠くから臭ってくる。まさか……。最悪のイメージが頭をよぎった。確かめる方法は一つしかない。

健二はステージの右端にいるカリタカに近づこうと群衆をかきわけて進んだ。つもりだったが実際はほとんど進んでいない。後ろから前へ進むより、横に移動する方が数倍難しかった。というのも、後ろにいる観客が少しでも近くでシャンプー ラバーズを見ようと前の観客を押すために、健二がいるステージ前は人との間が一切なくなっているのだ。

これ以上前に進めない。曲は既に最後のサビが終わっている。健二は焦った。どうしよう。一刻を争う事態なのに。

ここまで来たらやってやる。健二はステージに手を掛け、ジャンプで飛び乗った。ざわめく観客。ダンスを止めるシャンプー ラバーズ。

そんなに騒ぐことはないだろう。ただ向こう端に移動しようってだけなんだから。

端まで駆け足で移動し観客側に降りようと、ステージから片足を降ろしたところで気がついた。

今、ステージの上で確かめればいいんだ。いけない。興奮して頭が回らなくなっているようだ。

降りるのを止め、すつと後ろを振り向く。シャンプー ラバーズの三人が体を寄せ合って震えていた。

これは！？ひよつとして超能力に気がついてしまったのか。でもやらなくてはならない。ファンとしての使命だ。

まずはカリタカからだ。

「カリタカさん、僕と握手してください」

「きゃあああ、誰か、誰か来てくださーい」

悲鳴をあげるカリタカ。

「こらー、おまえなにしてる」

警備員が健二に駆け寄ってきた。

くそつ、人が善意で助けようとしてるのになんで邪魔するんだ。

こうなったら実力行使だ。

健二はカリタカに抱きつき、そのサラサラな黒髪に顔をうずめた。くさいくさいくさいくさい。

それは間違いなく例の臭いだった。死の臭い、デススメルだ。とつさに思いついたにしては良いネーミングだ。スガ二回続くと言いつらいから一つ取り除こう。デスメル。良いじゃない良いじゃない。「こらー。その手を離せ」

警備員が二人がかりで健二を羽交い絞めにした。

ネーミングなんて考えてる場合じゃなかった。くつそー。健二は地面に押しつけようとすると警備員に抵抗しながら叫んだ。

「シャンプー ラバーズの三人は死にます。近い将来必ず死にます。病気が事故か分からないけど必ず死にます。だから、なにか手を打たないといけません。それが出来るのは僕だけなんです。だから、放せこの野郎。おまえらにそれが出来るのか。シャンプー ラバーズの三人を救えるのか」

「なにを言っているんだ。ふざけるのもたいがいにしろ。警察に突き出してやる」

警備員が健二の腕をねじった。

「いたあい」

カメラ小僧のフラッシュが健二の目を焼いた。

「ああ。撮るな。撮るんじゃない。撮らないでくれえ」

健二の痛切な懇願は、絶え間ないシャッター音にあっさりとかき消された。

アイ ウィツシュ アイ ワー ア スペシャル

「もう二度とこんなことがないように、親御さんはしっかりと管理してください」

一日中健二を取り調べたブルドッグのような頬をした警官が健二の両親に向かって言った。健二の父である健三は肩をすばめ、深々と頭を下げた。健二はその姿を見て、心底ショックを受けた。

家で好き勝手に威張り散らし、ことあるごとに警察官をはじめとする公務員を馬鹿にする父が、まるで万引きを見つけた老人のようによぼくれて頭を下げるなんて。

健三が呆然とする健二の頭をつかんで無理矢理押し下げた。

「この通り本人も反省しておりますので、どうかお許し下さい」

「いえいえ、もういいですよ。健二君も反省しているようですし」

ははー、とまるで黄門様の印籠をかざされた悪代官のように健三はへりくだった。

家に帰ると、母親のおかえりなさいと同時に、健三の鉄拳が飛んだ。

ボコッ。鉄拳は健二の側頭部にヒットした。目の中で星がいくつか瞬いた。

「馬鹿野郎！！恥をかかせやがって」

健三が馬乗りになり健二を殴りつける。健二の顔があつという間にはれていく。いつもならかばってくれる母親も、目を三角にして健二をにらみつけていた。

健三が打ち疲れ健二から離れると、母親が見計らったようにスポーツ新聞を健三に手渡した。

「シャンプー ラバーズ襲われる。犯人は十四歳の中学生。コスメティックは近い内に死ぬと叫び散らす……。恥ずかしい。恥ずかし過ぎて父さんは死にたいぞ」

そう言って新聞を健二に投げつけた。健二は脳震とうの中、震え

る手で新聞を読んだ。

「恥ずかしい恥ずかしい」

健三は連呼しながら書斎に入ってしまった。母親も

「これがご近所さんにばれたら、買物にも行けない」

と言つて寝室に消えていった。

シャンプー ラバーズの三人を助けたかっただけなのに。興奮が冷め、急に悲しくなってきた。

洗面所で血で汚れた顔を洗い、自分の部屋へいく。ベッドにうずまると、涙がドボドボ流れ出した。自分は一人ぼっちだ。ロンリーボーイだ。こういうときに友達がいれば慰めてくれるんだろうな。健二は涙を拭いて、パソコンのスイッチを入れた。友達はいなくても擬似友達ならたくさんいる。

エクスプローラーを開いて、お気に入りからいつものチャットルームに飛んだ。

Kへ健二へ みんな、久しぶり！！って一日空けたただけけど

特技猫まね〃おいつす。おひさ！！って一日ぶりだけど

三途の川流れ〃Kくんこんばんみ。ってもう朝になりかけてるけど

なんて温かいレスポンス。この部屋の住人はいい人ばかりだ。

草履蟲男〃おう。よく来たな。歓迎してやるよ

くーー、何様のつもりだ、草履蟲男。この部屋じゃ自分の方が二ヶ月も先輩なのに。

K〃別に草履さんに会いに来たわけでは断じてない

特技猫まね〃まあまあまあ、喧嘩しないで仲良くやりましょうよ

三途の川流れ〃そうですよ。みんなシャンプー ラバーズの大ファンなんだから絶対に仲良くできるはず。これ以上シャンプーの三人を悲しませちゃいけません

草履蟲男〃その通り。あの豚ゴリラはどうでもいいけどカリタカとドッチにこれ以上嫌な思いをさせるのは俺がゆるさねえ

こいつ、またウーちゃんのことを豚ゴリラ呼ばわりしやがった。

特技猫まね「草履蟲男さんもいい加減にしなさい。Kさんも挑発に乗らないように」

三途の川流れ「そうだそうだ」

特技猫まねさんに機先を制された形になり、健二は草履蟲男に対する罵詈雑言を飲み込んだ。

草履蟲男「へっへっへ。事実なんだから怒ってもしょうがねえよな。それよりおめえにもいいもん見せてやるよ」

アップローダーのURLが草履蟲男によって打ち込まれた。ひょっとしてウイルスじゃないのか。そんな健二の心配を見越したように草履蟲男が、ウイルスなんて入ってねえから心配するなよ、と書き込んだ。

くっそう。健二はやるせない悔しさに身を焦がした。いつそのままだま落ちてやるうか。

特技猫まね「これは見ておいた方がいいよ」

三途の川流れ「そうだねそうだね。見るだけじゃなくて保存しておいたほうがいいと思うよ」

お世話になっっている二人に言われて、黙って落ちることも出来なくなった。恐る恐るそのファイルを開く。なんとその画像には、健二が写っていた。

最初はそれが自分だとは分からなかった。警備員に羽交い絞めにされながらカメラに向かって吠えている子供。ぼさぼさの髪の毛に血走った目。まるでどこから借りてきたようなバランスの悪いでかい鼻に、伸びきった鼻の下。

草履蟲男「すごいだろう。これは俺様が自分で撮ったもの、すなわち世界に一枚しかないオリジナルだぜ。すごいだろう」

草履蟲男の自慢に反抗する余裕はない。自分の醜態に、言葉が出ないほど打ちのめされた。

草履蟲男「どうした。うらやましくて声も出ないのか。写真を見れば分かると思うけど、俺とシャンラバの距離は五メートルとない。

俺は目の前で事件の一部始終を見てたんだ。すごいだろ〃

特技猫まね〃すごい写真だよね。僕の写真も草履蟲男さんのように鮮明に写ってはいないけど、違った角度で犯人が写ってる〃

先ほどと同じアップローダーのURLが表示された。見たくないが、見ないわけにはいかない。

ファイルを開くと、健二の呆けた顔がアップで出てきた。これは抵抗を止めて観念した後の写真だろう。まるで喪黒福造との約束をやぶって落ちるところまで落ちた男の表情だ。

三途の川渡り〃俺のもついでに見てください！〃

三途の川渡りさんの画像にも健二の醜い姿がはつきりと写し出されていた。激しいフラッシュとシャッター音、その奥でにやけている人間の束。健二は地上に出てきて六日目経ったセミの気分だった。ネット上では、健二の行動、顔、スタイル、着ている服などが散々ネタにされているんだろう。

草履蟲男〃おいおい、うらやましすぎて落ちたなんて言うんじゃねえぞ。なんか反応しろよ。Kさんよう〃

脳が宇宙空間を浮遊している。ふわふわして、体が自分のものじゃないみたいだ。もうどうなったっていい。

K〃なんだよこのブサイク。キモイにもほどがあるだろう。てか、こいつなにやってんだよ。超変態だろ。こいつ絶対結婚できねえ。というか、その前に彼女とか一生できねえだろ〃

三途の川渡り〃ですよねですよね。しかも、こんな写真が出回っちゃったらもう救いようないですな〃

特技猫まね〃でも、2ちゃんねるなんかでは一周して、彼を崇拜する輩も現れているようですよ〃

草履蟲男〃確かにある種のカリスマ性はあるよな。でも、俺はこんなキモイ奴、近寄りたくねーな〃

三途の川渡り〃ですよねですよね。実際のところ、これでシャンラブが死んだりしたら、神認定ですよね。これまでに一番の神になれるんじゃないですか〃

草履蟲男「マチガイナイ」

特技猫まね「間違いないでしょうね」

神になる。そうだよ。これは自分の能力をアピールする最大のチャンスじゃないか。シャンピー ラバーズの三人は必ず死ぬ。自分は神になりかけているんだ。健二はキーボードをジャズピアノリストのように激しく叩いた。

K「こいつは神になる。必ずなるよ。こいつは神だ。もう既に神なんだ」

マスコミとの遭遇

それから二日後、シャンプーラバーズの三人は死亡した。リハール中の彼女らの上に、特設した星型の照明が落下したのだ。

事故の異様性も相まって、マスコミは死を予言した健二の行方を一斉に追った。警察に捕まり、ネット上に画像が広がっている健二を見つけ出すのは、泣く子も東南アジアに売り飛ばすマスコミにとつては赤子の手をキムラロックでへし折るようなものだった。

シャンプー ラバーズの三人が死亡した翌日の朝、健二は連打される呼び鈴の音にビクリと反応した。

遂に来たか。三人の訃報を聞いてから一睡もしていない。本来なら悲しくて大粒の涙で枕を濡らしているところだろうが、それを凌駕するアドレナリンが健二を突き動かしていた。

マスコミの襲来を予期した健二は、まず始めに聞かれるであろうことを書き起こし、そして質問に呼応する答えをその下に書き込んだ。そしてそれを丸暗記するべく暗唱。間違ったら髪の毛をかきむしって、また最初からはじめる。そんなことを一晩中ずっとやっていた。

やれることはやった。

健二は手首に書いたカンニングリストを見て深くうなずいた。

「なんですか一体。朝っぱらから騒がしい」

困惑した健三の声が聞こえた。昨夜も遅く帰ってきたので、シャンプー ラバーズの事故を知らないのだろう。

「おはようございます。朝里テレビの者です。健二くんはいらっしゃいますか」

「こら、抜けがけすんじゃないよ。あつ、おはようございます。私、高尾テレビの齊藤と申します。ぜひ、今回のコスメティック照明落下事件についてですね、健二君になにかコメントをいただければと思います。いや、ただでとは申しません。これはとりあえずのお

近づきの記念としまして」

「あつ、ずるい。そんなもの渡して。倫理規定に反しますよ」

「なにをぬかす。どの口から倫理なんて言葉が出てくるんだ。おまえらは韓国のドラマでも紹介してればいいんだよ」

「言ったな。この軽薄淫乱テレビ局が。変態アナウンサーと一緒に地獄へ落ちてしまえ」

「なんだその手は。暴力を振るうのか。おまえらの大好きな人権派弁護士を呼ぶぞ」

下の騒がしさをよそに、健二は自分の姿を姿見に映して、様々な角度から確認していた。髪型よし。肌つやよし。鼻毛よし。横顔よし。後頭部よし。ズボンの食い込みよし。これで準備万端だ。

大きく息を吐き、意を決して部屋から出る。

階段から降りてくる健二にマスコミは素早く反応した。

「あなたが新井健二君ですか」

「すいません。シャンプー ラバーズの事故について一言。出来れば独占インタビューをお願いします」

「独占!? なにをふざけたことを言ってるやがる」

「そうだ。いい加減にしろ」「あんまり舐めた口を利いてると、後ろから三脚で殴りたおすぞ」

玄関に入っていたのは二社だったが、その扉の後ろに、とっさに数え切れないほどの人間が待機していた。健二は悠然と階段を降りきり、コホンと小さな咳をしてから話し始めた。

「この度は私のためにお集まりいただき、まことに感謝しております。弊社としましてはシャンプー ラバーズの事故に関して、以下の感想を述べさせていただきたいと存じております」

健二の堅苦しく不自然な言葉遣いにマスコミ勢は呆氣にとられた。

「なぜに皆様方がお忙しいなか、私などのために集まってくくださったのか、分からないほど私は愚鈍ではありません。理由は一つ。シャンプー ラバーズの事故。私がシャンプー ラバーズの死を五日前に予言したことに端を発していることは想像に難くないでしょう。」

あの予言は決して、適当に述べたものではありません。私はあのシャンプー ラバーズゲリラライブを観覧している最中に分かってしまったのです。シャンプー ラバーズの三人が遠くない未来に夭折するであろうことを」

辞書とスピーチ入門を駆使して作った文章を一音一句間違えずに言い切った。

おおおおおお。マスコミ勢にどよめきが起こる。両親がそれを引きつった表情で見ていた。健二の発言を信じていないのだろう。

「私はシャンプー ラバーズの三人の死を悟り、なんとか三人を救えないかと思案したのです。ひょっとしたら彼女達にそれを伝えることで、運命を変えられるのではないかと思ったのですが……」

そこで健二は指で目頭を押さえた。泣きの演出である。もちろん練習済みだ。マスコミ勢のテンションが上がっているのを肌身を感じる。健二はシャツの袖をまくり、ばれないように手首に書かれた文字を読んだ。

「しかし、彼女達は、私を、私の発言を一切無視した」

健二の強い口調に緊張が走る。

「私は、彼女達を救いたかっただけなのに、警察へ連れていかれて変質者扱い。この屈辱があなたがたに分かりますか」

最後の方は涙声になって訴えた。熟考したパフォーマンスではあったが、偽らない本音も入っている。マスコミの中からもすすり泣く声が聞こえる。と思ったら泣いているのは健二の母親だった。

「えー、朝里テレビの井筒と申します。質問よろしいでしょうか」
発言したのは朝のワイドショーでよく見かける男だった。自尊心を刺激された健二は鷹揚とうなずき、精一杯の低音で「どうぞ」と言った。

「まずその、予知能力というんですか。それが健二さんに備わったのはいつごろからなのでしょう？」

ふっ。健二は余裕の笑みを浮かべた。予想していた通りの質問である。カンニングを見るまでもない。

「それは四年前からです。夢の中に神のような人物が出てきて私に手をかざしました。そうしたら翌日に、その時飼っていた太郎という雑種犬から、ひどい臭いがしたのです。私はすぐにお風呂に入れましたが、臭いは一切取れませんでした。そしてその夜、太郎は急な発作を起こして急逝したのです」

太郎が四年前に死んだのは事実だが、それ以外はまったくのまかせだった。母親は泣きながらうなずいているが、健三は怪訝な表情で健二を見ている。

「すぐにそれが特殊な能力だと気付いたのですか？」

「はい。すぐにそれが私に授けられた特殊な能力だと気付きました」
「それじゃあ、その犬、太郎君ですか、がお亡くなりになられてから、コスメティックのライブまでに何人くらいからその臭いを嗅ぎましたか？」

「それは正直数えきれません。街中、例えば渋谷なんかを散策すると、一日に一人や二人じゃききませんね」

「ということは一日で何十人とかもあるんですか」

「ですねえ」記者の目を見つめて答えた。本当は渋谷など一回しか行ったことがない。

マスコミがざわめいている。

「これはすごい」「世紀のスcoopじゃないか」「でもまだ本物だと決まったわけじゃない」

そんな声が外から聞こえてきた。

「すいません。今日はこのくらいで勘弁してもらえませんか」

健三が健二とカメラの間に割って入った。

「健二はこれから学校なんです。それに私だって仕事に行かなくちゃならない。あんたらに玄関を占拠されてると非常に困るんだ」

苛立ちを隠そうとせず、健三は言い放った。健三が公権力の次に嫌いなものがマスコミだったことを健二は思い出した。

健三の勢いに押されてマスコミ各社は「また来ます」「今の放送しますから、今度は独占で」などの言葉と名刺を残して去っていつ

た。

静まり返った玄関。健三が健二を見つめて仁王立ちしている。また殴られる。

健二は顔を引きつらせながら健三の動向を見守ったが、健三はなにも言わず、書斎に消え、いつものようにスーツを着ると、沈黙のまま家を出て行った。拍子抜けしていると、後ろから母親に肩を叩かれた。まだ目がウルウルしている。

「やっぱり健ちゃんは私の子供よ。ずっと信じてた」

父親にスポーツ新聞を渡して怒りを煽ったのはどのどいつだ。喉まで出かかった言葉を飲み込んだ。普段は良い母親なのだ。

「黙っててごめん。でも、なんか言いづらくて・・・」

「いいのよ。思春期ってそういうものだから。それより健ちゃん、今日学校どうする？」

母親に言われて、シャンプー ラバーズの事件以降一度も学校に行っていないことを思い出した。

「行ってくるよ。休んではかりもらえないから」

不安げな母親に澄んだ目で答える。なにも心配することはない。さっきの映像が放送されればみんな自分を認めざるを得ないはずだ。スキップで階段を上がった健二は、踊りだす心に身を任せEXILEをほつふつとさせる動きで制服を着た。

早すぎた陽春

校内はざわついていた。二年生はもちろん、一年生も三年生も健二の話題でもちきりだった。

單純に顔見知りがテレビで出たことで興奮する者。健二の能力に否定的な者、肯定的な者。今までの健二に対する扱いを反省する者。これからどうやって取り入ろうか画策する者。話題に乗るタイミン
グを逃し、自分は一切興味がないというポーズを必死に取り繕う者。とにかく校内は健二一色に咲き乱れていた。

その中に健二が日常を身にまとうてふらつと学校へやってきた。

健二の心中はH I V即日検査の結果を待合室で待っている風俗嬢のように不安だったが、必死でそれを押し殺し、平素を装っていた。一瞬静まり返った後に、生徒たちが大挙して健二のもとに押し寄せた。

「健二君かつこいい」「サインください」「アイドル紹介しろよ」「サインください」「なんで今まで黙ってたんだよ」「サインください」「俺がむかしかわいがってやったの覚えてるよな」「サインください」「健二せんぱい、付き合ってください」「サインください」

予想してはいたがあまりの反響に、健二はどう対処してよいか分からなかった。

健二はまわりついてくる者を蠅を払うように押し退け、自分の教室へ向かった。教室に足を踏み入れた瞬間、静寂ボタンでも押したように、話し声が止んだ。嫌な空気だった。クラスメートは健二にどう接してよいのか分からないようだった。

やっぱり自分のことをよく知っているクラスメート達はテレビに少し出たくらいでは認めてくれないのか。

落ち込みかけたその時、クラス一の巨漢兼ひょうきん者として知られる相馬が健二の肩に手を置いて言った。

「みんなおまえのこと待ってたぞ」

ドツとクラスが沸いた。「調子良すぎるだろ！」とみんな心の中で突っ込みを入れていた。それは健二も同様だった。

「嘘つけよ。みんな朝のテレビ見たからそんなこと言っただろ」

「まあまあそんなつれないこと言うなよ」

相馬の軽口を契機にして、みんな健二に寄ってきた。

過去のことは・・・まあいいや。大物は小さなことにこだわらない。大事なのは未来だ。

健二は相馬の肩に腕を回して言った。

「仲良くやろうぜ」

マスコミが得意とするモノの一つに祭り上げというものがある。一個人や団体を会社の垣根を越えて団結し、無理矢理にでもスターダムにのせてしまうのだ。健二はマスコミにとってもってこいのターゲットだった。若くて才能があり、ほどよく頭のネジが緩んだ、マスコミに好意的な男。

新聞、雑誌のインタビューに著名人との対談、テレビレギュラー出演。次々にオファーが舞い込み、健二はそれらをスケジュールがかぶらないかぎり全て受けた。

たいがい人間は健二を褒め称えたたので、それらは仕事というより、接待を受けにくいようなものだった。

中には健二の能力に疑問を呈する者もいないではなかった。

毒舌を売りにしている上方芸人、芸能界のご意見番を自称している在日朝鮮人のベテランシンガー、科学を信憑し、オカルトを嫌悪している大学教授等だ。

「ただ偶然が重なっただけだ」

「なんの科学的裏づけもない」

「そもそもあいつが殺したんじゃないの」

「頭がバーニングしてるんちゃいますか」

そんなひねくれた口たちも風間恭平事件によって、おのずとつぐ

まざる得ない状況になる。

「超能力は今 2009」と題された特別番組にコメンテーターとして出演した健二が、司会進行していた風間恭平の死を番組中に予言したのだ。番組は生放送。風間は動揺して、司会進行どころではなくなり、健二に助けにくれとすがりつき、黙って首を横に振る健二に向かってゲロを吐いた。そして死にたくない死にたくないど錯乱したあげくに、特技であるブレイクダンスを踊りながら観客にゲロを撒き散らしたのだ。

当然番組はストップ。その後二十分間にわたって富良野のラベンダー映像が流れるという異例の事態に陥ったが、視聴率は33%を叩き出し、その数字はその年の高尾テレビ視聴率トップになった。

番組には、健二に対する批判、賞賛、風間への憐憫を綴った投書が山のように寄せられた。そして家に引きこもっていた風間は、トイレで糞を捻り出していた折に、急性脳溢血によって糞を尻穴から垂れ下げたまま急死した。

この一件で健二の能力を疑う者はいなくなり、健二を崇拜する者は増え続けた。崇拜者がyoutubeに動画を英語字幕付きでアップしたことにより、その人気は大海を跨いで瞬く間に広がっていた。

ユリゲラー以来の超能力ムーブメントが巻き起こった。

自らの生い立ちを綴った自伝を発表すれば即ベストセラー。様々な国で翻訳され、二百万三百万と増刷し、気付けば一ヶ月も経たずに世界中で一千万部を売り上げていた。

一生かかっても使い切れないほどのお金を手に入れた健二は、世田谷に豪邸を購入した。ドラッグに女、北京ダック。健二は世間の十四歳とかけ離れた豪遊を每晚続けた。

健三はそんなふしだらな行為を好ましく思っていなかったが、分厚い札束の前に、いつもの剛腹はいとも簡単に平伏し、今では健二からもらった金で六本木のクラブにいくのを生きがいでしていた。

母親も母親で、そんな健二健三の姿に触発され、歌舞伎町のホス

トクラブに毎夜毎夜繰り出すようになった。健三も自分が遊びまわっている負い目があるからなにも言えない。以前の新井家の面影は鼻毛一本残っていなかった。

本は売れ続け、黙っていてもお金が入ってくる状況が続いた。それでも健二はメディアに露出し続けた。

新井健二主演第一作「スーパーナチュラルボーイ」

新井健二デビュー曲「この星に生まれて」

新井健二初ディナーショウ「新井健二と語らう日本、そして地球の未来」

新井健二初教則DVD「あなたも一週間で超能力者になれる！」

新井健二初監督作品「次元を超えよう 共に歩もう」

出せば出すだけ、全ての商品が売れた。健二の真似をしようとした輩もごまんといたが、一人としてブレイクした人間はいなかった。当然の話である。健二の能力を真似出来る者などいない。

放蕩に安全ブレーキはついていない。健二の贅沢は止まることがなかった。

一流の人間は周りも一流で固めなければいけない。どこぞのペテン師に吹き込まれたことを健二は鵜呑みにし、実行した。

横浜の中華街でスカウトした料理人。髪の毛をセットするために表参道のカリスマヘアデザイナー。爪を切るためにNYのネイルアーティスト。体を洗うために吉原のソープ嬢。ボディガードにスティーブンセガール。尻拭きに曙の元付き人。

今の暮らしに健二はそこそこ満足していたが、欲望は果てしなかった。特に性欲に関しては貪欲に求め続けた。

くっさいんですけど、安やす子

健二はベッドに寝転んだまま女性タレント名鑑を手にとった。女性タレント名鑑には事務所別にタレントが列挙されており、顔写真と共にプロフィールが載っている。

今度はどの娘を落とすかおうかな。

よだれが女性タレント名鑑を濡らした。健二はおもむろに手に持っていた女性タレント名鑑を持ち上げ、掛け布団の上から自分の股間辺りに打ち下ろした。

「いたゝい」

新進女優の安やす子が掛け布団から頭を出した。

「ちゃんとやれ、くそ女。やる気出さないんだったら例のコマーシャルの件もなしにするぞ」

「ごめんなさゝい」

そう言っただけやす子は再び布団に潜り込んだ。

「おお、いいぞいいぞ。やれば出来るじゃないか。おうっ、おうおう。い、いくう」

「おおれ、ぼうびばばーぼ？」

やす子が顔を出し、口を健二でいっぱいにしてしながら訊いた。

「全部飲み。一滴もこぼすんじゃないぞ」

「はひ。にがーい」

にがーいと言ったやす子の表情に満足し、煙草に火をつけた。そのとき嗅覚が異常を感知した。

「くせえ、くせえええええ」

デスメルが鼻をついた。健二はやす子を思い切り蹴り飛ばした。ベッドから転がり落ちるやす子。

「臭いってなに。私がくさかったの。ねえ、嘘でしょ」

やす子が立ち上がり半狂乱ですがりついてきた。

面倒なことはごめんだ。どのみち助けることなんて出来ないのだ。

健二はやす子のどてつばらに蹴りを入れて、屋外へ出た。

やす子の処理は元CSIのボビーに任せればいい。健二は深呼吸した。

「く、くせえええ。まだくせえええ」

やす子がまだ近くにいるのか。それとも他の誰の臭いか。

周りを見渡すと主婦二人が立ち話をしている。

あの二人のどちらかだろうか。いや、ひょっとしたらチビデブコンビのように二人同時に死ぬのかもしれない。

健二は主婦に背を向けて駅に向かって歩いた。しかし臭いは消えない。

あのホームレスか。それともこの女子高校生、いや、あそこの妊婦がくさいな。

気付けば健二は商店街に入っていた。臭かった。どこへ行こうと例の臭いが消えない。気づけば駅についていた。

おかしい。こんなにも臭いが続くことは初めてだ。

その時、駅前の広場に設置された液晶ビジョンが目飛び込んできた。

北朝鮮、四日に人工衛星発射予定

最悪のシナリオが頭に浮かんだ。

「明日、四日に北朝鮮が人工衛星の発射を予定していることが、朝鮮労働党関係者筋の話から分かりました。北朝鮮は、もし日本が衛星を迎撃した場合、直ちに報復を加えると表明しています」

厚化粧のアナウンサーが眉間に皺を寄せて言った。

もし衛星が東京に落ちたら何人の人間が死ぬんだろう。

自分の想像に身震いした。しかし、現実問題、どこに行っても例の臭いが幅を利かせているのだ。

早く東京から逃げなければ。いや、この国から出たほうが確実にさるう。まずは家に帰って金目のものを持ち出す。それから出来るだけ遠くて自分の存在が周知されている国、アメリカあたりに高飛びだ。

臭いがさつきよりきつくなった。時間が経ったからか、人が増えたからかわからないけど、もうこの臭気に耐えられそうもない。

健二は人から逃げるように近くにあったワークショップに入った。防臭加工が施された防塵マスクを購入し着用する。

なにも臭いがしない。こりゃあいいぜ。

マネージャーに電話して、高飛びの手配を指示した。目的はまだ伝えない。情報はどこから漏れるか分からないから寸前まで極秘だ。群集が空港に押し寄せて逃げ遅れたりしたら困る。

右の口角だけぐいと上げた健二の表情は、十代とは思えない毒々しさに満ちていた。

激昂するタクシー車内

狭いタクシーの車内では防塵マスクを持ってしても臭いを防ぎきれない。

健二は窓を全開にした。しかし外も臭いために、苦痛は大して変わらなかった。

「クーラー止めたほうがいいですかね」

運転手が申し訳なさそうに訊いた。健二はそのままでよいと答えた。

この運転手も明日には死んでいるのか。人の良さそうな親父だ。助手席の前につけられた乗車員証には五味孝司 55歳 趣味 川釣りと書かれている。子供はいるのだろうか。いるとしたら、自分と同じくらいだろう。明日死ぬと分かっているれば、こんなことやってないだろうな。

柄にもなく感傷に浸った。

「お客さん、お若いですね。まだ十代ですか」

「ああ、いちおうまだ16だけど」

「ほほう。うちのせがれと一緒にだ。一人でタクシー乗るなんて大したもんですな。うちの鼻垂れ坊主なんて一人じゃなにも出来やしない。そのくせ飯の量は人の倍も食うんですよ。もうでかいのなんのって」

「はあ、そうですか」

「それが、こないだ県の相撲大会で優勝しましてね。部屋からスカウトされたんですよ。もうそれがうれしくてね。人生で一番嬉しかったかもしれないね。ほんで高校卒業したらすぐに入門ですかよ。だから今のうちから好きなだけ食わさんといけんと思ひましてね。頑張ってるんですわ。ハッハッハ」

胸がうずいた。この親父だけにでも教えてやろうか。袖振り合うも多少の縁で言うし。

「親父さん、今すぐ奥さんと子供を連れて日本から離れるんだ」

「はいっ！？　なにを言ってるんですかお客さん」

「明日北朝鮮のミサイルが落ちてくるんだよ」

「冗談はやめてくださいよ。脅かそうたってそうはいきませんよ」

「信じられないだろうけど本当なんだよ。今すぐ逃げればまだ大丈夫だから」

「いい加減にしてくださいよ。こちらおまんま食うのでいっぱいいっぱいなんだ。どこぞの馬の骨とも知れねえ餓鬼のたわ言きいてられっか」

親父の言い方にカチンときた。誰に口をきいてると思ってるんだ。
「だったら勝手に死にやがれ。後で死ぬほど後悔するんだな。まあ、どのみち死ぬんだけど。へっへー」

悪態を遮るように携帯が鳴った。夕陽テレビの木場からだ。

「はい、もしもし」

「もっすー。どうしたの苛立った声出しちゃって。ひよっとしてメンス？　なわけないか、オトコの子だもんね。あっ、ひよっとしてケツメンス？　これはオトコでもなるよ」

「用事にないんなら切りますよ」

「ちよつと待ってよケンちゃん。俺がなにも用がないのにテルするわけないじゃん。テレビマンの忙しさをなめちゃいけないよ。昨日も徹マン、一昨日も徹マン。そして今日も徹マン予定。とは言ってもマンはマンでもマンコのマンだけどね」

「切りますよ」

「わかったわかった。短刀直入に言うよ。新井君で特番を組もうと思ってるんだ」

「特番？」

「そう。四時間で「新井君VS世界の超能力者」ってタイトルでさ、新井くんが外人と超能力対決するんだ。ギャラも弾むよ。どうかなあ」

「でも、未来予知しか出来無いですよ、俺」

「いいの。外人のほうは適当に引つ張ってくるから」

悪い話じゃない。テレビに出た翌日は本やDVDが馬鹿売れる。

「いいですよ。その代わりギャラー一億円はお願いしますよ」

わざと一億円を強調して言った。親父に聞かせるためだ。

しかしバックミラーに映る親父はニヤニヤとふやけていて、一向に動揺が見えない。健二は聞こえなかったのかと思い、再度試した。「一億円ですよ。四時間で一億円。特番の出演料として一億円」

これだけ言えばいくら頭の遅い親父でも俺の凄さを理解したはずだ。

そんな健二の思惑に反し、親父は片方の薄気味の悪い笑みをバックミラー越しに健二に送っている。

なんなんだこのクソ親父は。なんていやらしい笑みだ。こんな表情を昔見たことがある。小学三年の夏休みに、クラスメートの成金満男が夏休みのスケジュールを訊いてきたときだ。自分が見栄をはって、本当は千葉に潮干狩りに行くのを、ハワイでウィンドサーフィンと答えたときに満男が浮かべた表情。嘲りと憐れみの入り混じったような、不愉快極まりない表情。あの表情と同じだ。

自分かが嘘をついていると親父は思ってる。考えたら無性に腹が立ってきた。すでに親父の生涯収入の何倍も稼いでるんだぞ。目にも見せてやる。

「すいません木場さん。話し変わるんですけど、今日の二時から恐縮です」って七時までやってますよね」

「えっ、やってると思うけど」

「あれって生放送ですよね」

「うん。毎日ゴム無しでやってるはずだよ。たしか今日はスペシャルで代々木公園でやってんじゃないかったかな」

「まじですか」

運命の巡り合わせを感じずにはいられない。

「今から俺、出られませんかね？」

「えつ。今からって、あと二時間もないよ」

「今新宿でタクシーの中なんですよ。だから三十分もあれば代々木公園行けます。マジでやばいネタ持ってくんでお願いします。マジヤバですから。木場さんが出演交渉したってことにしていいですから」

「えつ、えつ、本当に。でもまじでやばいことは駄目だよ」

「大丈夫ですよ。俺が出たら視聴率うなぎ上りでしよう」

「そうだねえ。分かった。今すぐに手配するよ。その代わりさっきの話忘れないでよ。俺が出演交渉したっての」

「分かってますよ。了解です。それじゃまた後で」

わざとゆっくりデカイ音がなるように携帯を閉めた。これではっちり。親父の慌てふためく様が目に浮かぶ。

「お客さん、成田でいいんですかい」

鼻の穴をふくらませて親父が言った。

「いや、行き先変更だ。代々木公園に向かってくれ。今すぐ。超急ぎだ」

健二は言うなり、一万円札を親父に向かって投げつけた。

核の行方 中二の終末

「なんとですね、今入った情報なんですが、あの世界的に有名な超能力者である新井健二さんが、重大発表があるとのこと、この代々木公園特設ステージに向かってくれているそうです。重大発表とはなんなのでしょう。楽しみと共に不安でもあります。ロビン佐藤さんはいかがですか」

「えー、これはすごいことです。そもそも新井さんはバラエティ番組なんかに出ないですからね。これは相当でかいニュースなんじゃないかな」

「そうですね。生卵でロッキーダイエットなんてどうでもよくないってきちゃいましたね」

「そうだねえ。生卵で痩せるわけねえじゃねえか、馬鹿野郎ってね」
「そんなこと言わないでください。元も子もなくなるじゃないですか」

「メキシコ辺りの生卵食って生死の境をさまよえばいいんだよ。もしたら馬鹿でも痩せるだろ」

「コマーシャル入ります」

コマーシャルに切り替わった。

「どう今のコメント？またネット上で騒がれちゃうかなあ」

マイクをオフにしてロビン佐藤が言った。

「もう勘弁してくださいよ」

司会を務める渡辺アナウンサーもマイクをオフにし、笑顔で答えた。

「こないだのアシスタントの娘、りかちゃんていったっけ。もう喰っちゃったの？」

「はい。売りが東北出身の純朴娘ってだけあって、あそこの締めりがすごく良いんですよ。飲めって言ったら飲んでくれたし。まあ、全体としては七十点ってところですけどね」

「いいなあ。俺も試食したいなあ。頼むよカズちゃん」

「わかりました。話しつけておきますよ。こないだみたいに3P、もう一人呼んで4Pってのもいいですね」

「いいねえいいねえ。また獣みたいな女連れてきてよ」

「分かりました。ロビンさん好みのむっちむちで無知な女連れてきますよ」

「頼むよ。ヒッヒッヒ」

「フッフッフ」

「新井健二さん入ります」

ADに先導され、健二が特設されたステージにやってきた。観客席からヒステリックな声援があがる。

「おれあいつ嫌いなんだよな」

ロビンが小声で言った。

「僕もです。セレブ気取りが癪に触りますよね」

渡辺がさらに小声で答えた。

「おつかれ〜す」

顎の上下運動で挨拶する健二に、渡辺は首の上下運動で、ロビンは立ち上がり腰の屈折で答えた。

「今日は、すごいネタがあるって聞きましたよ。放送前にこっそり教えてもらえませんか」

猫なで声を出すロビン。

「すぐに発表するつもりなんで、今はいいですよ」

健二はロビンの申し出をあつさり拒否した。

「放送入ります。5、4、3、」

ADの掛け声でステージ上に緊張が走る。

「えー、スペシャルなゲストがついさきほどいらっしゃってくださいました。新井健二さんです」

「こんにちは。超能力者の新井です。今日は重大な発表があり、急遽出演させていただく運びとなりました」

「ひょっとして、それは北朝鮮に関連することですか。それとも噂

になっている安やす子さんについてとか」

ロビンが口を挟んできた。さっきの報復のつもりなのだろう。馬鹿に構うことはない。

健二はロビンを黙殺して先を続けた。

「これは非常に重大な発表です。だから、心して聞いてください。そして聞いた後も落ち着いて、節度ある大人としての行動を心がけてください」

「それって、まさか北朝鮮の核爆弾が落ちてくるなんて言うんじゃないでしょうね」

再びロビンが割り込んできた。観客から喚声もれる。

こいつ、頭を叩き割って欲しいのか。生放送じゃなかったら番組を一旦止めて、セット裏に引きずり込んでボコボコにしているところだ。健二はロビンの発言に一切反応せずに言葉を繋いだ。

「北朝鮮の核爆弾が、ここ東京に落下します」

観衆の喚声は悲鳴に変わった。ざわめく会場。怒鳴り声が飛び交い、子供の泣き声が響いた。

「みなさん落ち着いてください。冷静に行動してください」

健二の声は人々の騒乱にかき消された。

それでも健二は叫び続けた。少しでも人々を正しい方向へ導くため、ではなく、最善を尽くす姿をカメラに残すためだ。

怯えきった群衆は、我先にと出口に殺到する。

転んでそのまま踏まれていく女性。口から泡を吹く中年。血だらけの子供。

それでも健二は声が枯れるまで叫び続けた。

「みなさん、落ち着いて行動してください。まだ核爆弾は落ちてきません。だからどうか落ち着いて……」

健二は今までの献身が徒勞だったと気づいた。テレビ局のカメラマンがすでにいなくなっていたのだ。

周囲を見回すとカメラマンどころか、ロビン斉藤や、局アナ渡辺もいない。放送は完全に機能停止していた。

こうなればさっさと逃げるしかない。

ステージから降りようとした健二に誰かがぶつかってきた。転倒し後頭部を打ち付けた。

「誰だよくそっ！」

顔を上げると薄気味悪い肥満体の男が健二を見下ろしていた。

「ぼつと突っ立てんじゃねえよ馬鹿。どけっ！」

立ち上がって怒鳴りつけた。しかし男は動こうとしない。それどころか、両手を広げて道を塞ぎ、健二を見つめて怪しく笑った。

「なんだこの野郎。そこかねえとただじゃおかねえぞ」

きつい剣幕でまくし立てたが、肥満男は気に介した様子がない。

肥満男が健二に向かってゆっくりと歩いてきた。

「なんだ、なんだってんだよ……」

肥満男の右手に握られている光物に気がついた。凶暴な歯がついた大型ナイフ。刃がアリゲーターの歯のようにギザギザと尖っている。

なんか分からないけど、こいつやばい。

とつさに身を翻して逃げようとしたが、一瞬遅かった。健二の脇腹に肥満男のナイフがふかぶかと突き刺さる。

「なにすんだよ。どうすんだよこれ。どうすんだよお」

「おまえがシャンラブの三人を殺したんだ。ウーちゃん、ドッチ、カリタカの仇だ」

そう言つて肥満体はナイフを引き抜き、今度は左胸に突き刺した。「うおええうええ」

断末魔の叫びと共に血しぶきが肥満男の黄色いバンダナに飛散した。

これって、ひょっとして……

健二の脳裏に絶望が閃いた。

健二は最後の力を振り絞りインナーの襟元をかつ開くと、その中に鼻を突っ込み深く呼吸した。

「くせえええええええええ」

臭源は溢れ出る血液ではなく、まぎれもなく例の臭い、デススメルだった。

核の行方 中二の終末（後書き）

ちよいと昔に書いた物なのでネタの鮮度がいまいちですね。すんまそん。

拙い文章をわざわざ読んでくれた方、本当にありがとうございます。次作の参考にさせていただきたいので、よろしかったら感想等お願いします

P・S 宇多夢シヨコラさん、丁寧な感想をありがとうございます。

初めての経験だったので枕力バーを塩味にしてしまいました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7010m/>

他人の匂い

2010年10月8日13時48分発行